紹介

細谷松太著
『日本労働運動史』
『労働戦線の分裂と統一』
（細谷松太著作集Ⅰ・Ⅱ）

細谷松太と言えば、戦前は全協の指導者として、戦後は産別民主化運動の中心人物として知られており、現在は新産別の顧問として労働運動史の研究・執筆にたずさわっている。本著作集は第一巻が『日本労働運動史』、第二巻が『労働戦線の分裂と統一』と題され、第一巻の巻頭に収められた「労働組合運動八〇年代の課題」を除き、全て過去の論文等の再録である。

第一巻には、今述べた「労働組合運動八〇年代の課題」、表題作の「日本労働運動史」と「労働組合民主化運動」、それに「労働運動史年表」と渡部徹氏の「細谷松太論——解説に代えて——」が収められている。

「八〇年代の課題」では、筆者は、日本の過去の労働運動やポーランド問題に触れ、体制的か否か、革命的か否かという問題で組合という原点を失ってはならない、組合の行なう賃金闘争自体がそのまま革命的運動となることもあるのだ、と民同運動以来の、一貫した、「組合の原点」を強調する立場を堅持している。

「日本労働運動史」は一九四八、四九年に出版されたもので、労働運動の勃興から戦時下の総同盟等の解散までを扱ったものである。この版で約二三〇ページに及ぶものだが、一九二二年の向上会の分裂、二六年の東京市電自治会の分裂、二七年の日本製陶組合の分裂や、総同盟九州連合会の分裂、さらに二九年の遞友同志会の分裂など、組合の分裂と統一という問題を中心に、中小組合や地方組織、さらには国家社会主義労働組合にまで目を配った、現在から見ても密度の濃い運動史である。

第二巻には、表題作の「労働戦線の分裂と統一」の他、「二・一スト」「論文集」「人物論」「産別記」「民同記」「随想」と、「細谷松太著作一覧（主要なもののみ）」、小山泰蔵氏の「文筆家としての細谷——解説に代えて——」が収められている。第二巻は、第一巻を〝タテマエ〟とすると〝本音〟、或いは〝公〟に対する〝私〟の面を表出したものと言える。

「労働戦線の分裂と統一」自体、四六年十二月から四八年三月までの戦線統一に関する論文を集めて四九年一月に出版されたものであり、統一した論の展開ではない。それだけに、執筆時期と左右への批判の度合の変化が読みとれておもしろい。

「二・一スト」「産別記」「民同記」は、第一巻の「労働組合民主化運動」ではよくわからぬ具体的な、共産党、産別会議、GHQ等の人物の関係や感情の動きが浮き彫りにされ、当時の諸事情の理解の助けになる。細谷と徳田球一が対立して行く過程や党フラクションに反対する必要性など、公式的な民主化論では理解できない部分が多いが、筆者自から「私記」と称する「産別記」等で割合明らかにされたと思う。

「人物論」「随想」は読み物として大変おもしろく、また、特に、戦前の社会を知る上で、教えられることもあった。特に印象に残ったのは、筆者が十五歳で初めて就職したガラス工場の悲惨な状態の叙述（二五九、四七二ページ）、戦前、最大十三万人の組合員を擁した日本海員組合も、実際は強制的に加入させられたようなもので、

組合員という意識がなく、「水夫たちのだれもが、組合に入りながら、まだ組合というものを知らなかった」（四八五ページ）といった状態であったこと、「大正の初め」の頃は、「職工と呼ばれれば、いい気持ちはしなかった」（四四七ページ）ということで、職人は職工を極度に低く見、筆者の親戚の左官屋が紡績女工を妻にしたことを、非常に肩身の狭いことと思っていた（四四八ページ）ということなどである。

以上いずれも過去にさまざまな雑誌に掲載されたものとはいえ、「著作集」という形でまとまって目に触れることができるようになったのは大変ありがたいのであるが、二、三残念に思う点があるので、最後に書き留めておきたい。まず、二冊という制約があったためかわからないが、民同運動初期が中心となり、総評結成前後についての文章が全くないこと、次に、第一巻の年表は『日本の労働組合運動』からの借用で、細谷自身の年譜がないこと、そして、「日本労働運動史」に若干の誤植が残されていること、以上である。

（A5判　第一巻四九六頁　第二巻五一六頁　一九八一年七月　柵出版会〈東邦出版発売〉　各五〇〇〇円）（小泉洋　京都大学大学院生）

L・フェーヴル著　二宮　敬訳
『フランス・ルネサンスの文明』
――人間と社会の基本像――

本書は一九二五年にフランスのミュールーズで開催された学術講演会におけるリュシアン・フェーヴル Lucien Fevbre の講演論文 *Les principaux aspects d'une civilisation. La première Renaissance française; quatre prises de vue* の全訳である。フェーヴルは僚友マルク・ブロック Marc Bloch と共にフランス歴史学界における『経済社会史年報』の創刊者、いわゆるアナール学派の先駆者としてわが国でも近年脚光を浴びるようになった。四章からなる本論文は一九二五年刊行の学術誌に分載され、さらに一九六二年の彼の遺稿集に再録されたものである。訳書あとがきによれば、本論文が半世紀以上も経た今日に邦訳された理由・意義は二つある。第一は、フランスルネサンス理解のための有益な小論であること、第二は、フェーヴルのその後の輝かしい業績を支えた歴史家としての方法と態度がここに色濃く投影されていることである。従来イタリアに力点が置かれすぎ、看過されがちであったわが国のフランスルネサンス研究に格好な手引書となり、かつアナール学派の原点というべきフェーヴルの思想を紹介するという二つの意図がこの訳業に盛り込まれている。そして、フェーヴルが一貫して提唱してきた「生きた歴史学」、「全体史」の精神が、フランスルネサンス研究という舞台上で展開されたものが本書なのである。

著者は最初に〈はしがき〉で「文明」の概念に言及しながら、初期フランスルネサンス社会の「考え方や習俗の総体」を最も特徴づけたものとして三点に注目する。すなわち、〈知の追究〉、〈美の追究〉、〈聖なるものの追究〉の三点である。この三点がルネサンス・ユマニムス・宗教改革を生きたルネサンス人の情熱的営為の要約であるという認識のもとに主たる検討の対象とされ、著者の豊かな想像力のスクリーンに典型的な形でそのシルエットが映し出されてゆく。

第一章では、ルネサンス期のフランス人